# 柳　宗悦の民芸論（XXV）
## －今　和次郎の視点－

八　田　善　穂

目　次

（1）『日本の民家』
（2）『民家論』
（3）考現学の発想
（4）民芸論の考現学

柳[1]が大正15年（1926）9月に発表した「下手ものの美」[2]は、同年4月に印刷、配布された「日本民藝美術館設立趣意書」[3]と共に、「民芸」の語が使われた最初期の文章である。この末尾には次のように記されている。

「許されるなれば、私は片田舎の忘れられた民家に於て塵につゝまれる雑器を取り上げ、新しく茶をたてよう。此時こそ道の本に返つて、初代の茶人と心ゆくばかり交はる事が出来よう。[4]」

ここで使われる語「民家」は、ことばとしては古くからのものであるが、日常的に使われるようになったのは、大正11年（1922）に今和次郎[5]の著作『日本の民家――田園生活者の住家――』[6]が刊行されて以来のことである。これは日本最初の民家の本であった。また今は考現学の創始者としても知られている。

本稿は、柳の民芸論とほぼ同時期に発表された今の民家論および考現学について、民芸論との接点を探ろうとするものである。

---

1）柳宗悦（1889（明治22）－1961（昭和36））。
2）筑摩書房版全集第8巻「工藝の道」所収。
3）同第16巻「日本民藝館」所収。
4）全集第8巻、p. 14。
5）1888（明治21）－1973（昭和48）。
6）鈴木書店刊。

（1）『日本の民家』

今は明治45年（1912）に東京美術学校図按科を卒業した後、前年に設立された早稲田大学理工学部建築学科の助手となり、佐藤功一[7]に師事した。

大正4年（1915）頃、新渡戸稲造[8]の書斎で行われていた郷土会に出席し、柳田國男[9]、石黒忠篤[10]らと接する機会を得た。

大正6年（1917）、柳田と佐藤が発起人となり、民家保存を主旨として「白茅会」が結成された。会員には石黒、細川護立[11]、小林古径[12]、内田魯庵[13]、今らがいた。翌7年（1918）まで各地を視察し、同年10月に『民家図集第一輯埼玉県の部』[14]が刊行されている。白茅会はこの年に自然解散となるので、『図集』は同会唯一の成果となった。

大正8年（1919）には、当時農商務省農政課長であった石黒の下で農商務省嘱託となり、全国にわたって農村住宅を視察した。岩波文庫版『日本の民家』[15]の解説には、次のように記されている。

「大正七年、白茅会が消えた後、彼は郷土会の一員として柳田の民俗学の研究会に出席しながら、大正八年、九年、十年と一人で全国行脚を持続してゆく。

こうした自由な調査が可能になったのは、白茅会で知りあった石黒忠篤のおかげで、石黒は当時、農商務省の農政課長の席にあり、後に農林大臣に上るほどの有力官僚であったから、相当に自由がきき、農村の住宅と副業の調査などの名目で、報告書等一切なし、見たことをただ胸に納めておくだけの公務出張を“乱発”してくれた。

今和次郎はリュックを背に、三十代前半の充分の手持ち時間を、歩きに歩い

7）建築家、1878（明治11）－1941（昭和16）。
8）教育家・農学者、1862（文久2）－1933（昭和8）。
9）民俗学者、1875（明治8）－1962（昭和37年）。
10）農商官僚、1884（明治17）－1960（昭和35）。
11）美術史家、1883（明治16）－1970（昭和45）。
12）日本画家、1883（明治16）－1957（昭和32）。
13）文学者、1868（明治元）－1929（昭和4）。
14）洪洋社刊。
15）1989刊。

た。北海道から九州までほぼ全国に足を伸ばしている。

その成果が一冊にまとめられたのが、

『日本の民家』

にほかならない。[16)]」

『日本の民家』初版の序は以下の通りである。

「この小さい本は、なるだけどんな人へでも興味をもって田舎の生活や家屋のことを知ってもらえるようにと心掛けてかいたものである。都会の人たちへは田舎のことを知ってもらうために、また田舎の人たちへは他の地方のことを知ってもらうために役立てば幸だと思って。

前半のはなしの骨子は、東京女子大学および戸隠夏季大学で講演したもので、後半の採集は『住宅』その他の雑誌に載せたものを集めたものである。

わたくしは旅行をはじめてからまる五年になる。その間しょっちゅう可愛がって手びきをして下さったのは柳田国男先生である。なお、民家の調査についての消息をここに記して諸先輩へのお礼をして置きたいと思う。

大正六年に柳田先生と佐藤功一博士とが発起されて、わが国の各地の古い民家を保存する主旨で、「白茅会（はくぼうかい）」を作られた。その会員は、石黒忠篤（ただあつ）さん、細川護立（もりたつ）侯、大熊喜邦（よしくに）博士[17)]、田村鎮（やすし）さん、内田魯庵（ろあん）先生、木子（きご）幸三郎さんであって、わたくしもその末座に加えてもらって、大正七年まで引き続き各地を旅行したが、『民家図集』埼玉県の部はその仕事の記念として残された。

白茅会は大正七年の夏「郷土会」と合同して、神奈川県津久井郡内郷村に旅行したが、そのときのわたくしとしての記録は、巻末に納めたものである。

その後、大内武次氏、小田内通敏（みちとし）氏、蘆田伊人氏と共に人文地理学の勉強をはじめ、わたくしはそこで家屋のことを分担して度々（たびたび）各地を旅行した。

大正八年の夏から農商務省で、石黒農政課長の下で農村住宅の調査を始めることになり、現実の問題として各地を旅行することになった。次いで有働開墾課長の下で、各地の移住家屋の研究をやることになり、同課の人々の仕事を手

16）岩波文庫『日本の民家』、pp. 342－343。
17）建築学者、1877（明治10）－1952（昭和27）。

伝っている。ここでは専ら改良農家建築のことを掌(つかさど)っているのである。[18)]」

『日本の民家』は刊行以来、何度か異なった版が刊行され、そのつど内容に若干の異同がある。それぞれの目次は次の通りである。

①『日本の民家』(鈴木書店、1922年)

日本の民家

Ⅰ　田舎の人達の家

Ⅱ　構造について

Ⅲ　間取りについて

絵と説明

一山村の住居に関する調査（神奈川県津久井郡内郷村）

②『日本の民家』(岡書店、1927年)

初篇　日本の民家

中篇　絵と説明

終篇　山村の調査

「絵と説明」に初版になかった7項目が追補され、山村の調査に秩父の浦山村が加わった。

③『日本の民家』(相模書房、1954年)

日本の民家

間取りの由来考

採集

調査

新たに「間取りの由来考」が加わり、「採集」に21項が追加された。また「調査」の項に「武蔵国南多摩郡恩方村」が加わった。[19)]

18) 岩波文庫『日本の民家』、pp. 19－20。

岩波文庫に収められたのは上記③の増訂第三刷（1970）である。そこでは冒頭で次のように述べられている。

「都会に住み慣れている人たちは田舎の人たちの家を本当に考えることは出来ない。何故なれば、都会の人たちは自分の家の住み勝手をば、都会という大きな背景の下で考え、また、各産地から貨物として入って来る瓦（かわら）、材木、煉瓦（れんが）、またはコンクリートその他の材料を買入れて自分たちの家を作るのであるから。そして生活に都合のいいように、都会の人たちの喜びを表現するように作っているのであるから。

……

都会地でない田舎の土地で働いている人たちの家はそんなわけに行かない。どこからでも便利ないい材料をもって来るわけには行かないので、自分たちの土地で得やすい材料を主として作らなければならない。また、土地によって気候風土がちがうから、雨の多いところでは、それに備えるように、寒いところでは、寒さを防げるように、それぞれ自分たちで工夫して作らなければならな

19）同書、編集付記。なお、この相模書房版には、柳が次のような書評を書いている。

「今君の「日本の民家」は、この種の本では、もう古典的な存在で、今度更に新版が出たことは、その普及を更に広めるために大いに役立つと思へる。日本の建築に興味を持つ人は、須らく座右に一本を備へるべきである。

日本の建築といふと仏閣や神社や宮殿や茶室などが代表者として浮ぶが、実際にはもっと民衆生活に、ぢかに交った民家を顧るべきであらう。併しいつも後回しにされてゐたこの分野に、いち早く眼を向けたのが今君で、この方向の開拓者の一人に数えられるべきであらう。私も嘗て今君と一緒に旅したことがあるが、仕事に熱心で、観察が行き届いているのに感心したことがある。

この本の頁を繰ると誰も気付くであらうが、見取図が非常に上手で、この種の学者にこの才能が恵まれてゐることは、非常に有難いことだといへる。言葉だけでは描写出来ぬものを図で簡単に読者に伝へてくれる。それがこの本の値打を一層高めてゐるのである。

日本の民家はまだまだ大いに研究されてよいし、その美はもつと深く尊ばれてよいから著者から更に大著が編まれる日のあることを望んで止まない。それに今は民家の危期で随分大切な家が倒れてゆく現状がある。さしづめ図録だけでも大集成されないものか。」（『産業経済新聞』昭和29年5月31日。「値打高める見取図」の見出しで。全集第14巻「個人作家論・船箪笥」pp. 527－527所収）

い。都会の人たちは物好きに汽車の窓から変った恰好の田舎の家をながめて、その建築の工夫に驚くことがあるかも知れないが、でもそれは、その土地の人たちにとっては極めて自然な建築的工夫なのである。また反対に、極めて気のきかない間取のやり方だと考える家を沢山見るかも知れないが、それもやはりその土地の田舎の人たちの日々の生活を本当によく知らなければ、むざと批評することが出来ないことなのである。[20)]」

「田舎の家はまた、都会の住宅に見られない注意さるべき点を色々もっている。都会は漸次(ぜんじ)に画一的な世界的な文化の波にひたされて行きつつある。日々進歩して行くあらゆる文物をとり入れて、愉快な歩みをして行けるにかかわらず、田舎ではそれらのとり入れられる度合が少ない。極く徐々にそれに接触して行くに過ぎない。だが言い換えると、都会は日々変っていて、今日のものは明日はもうないのだけれど、田舎では一度植え付けられたものはなかなか消失されることはなくて、その土地の色彩となっていつまでも保存されてのこっている。[21)]」

以上は「田舎の人たちの家」第1節「都会の家との違い」の中の文章である。この後第2節「水田の村の人たちの家」、第3節「畠の村の人たちの家」、第4節「山の村の人たちの家」、第5節「漁村の人たちの家」と続く。

### （2）『民家論』

大正15年（1926）8月から昭和2年（1927）4月にかけて、「アルス大建築講座」の第1巻、第5巻、第7巻、第9巻の4回にわたり、今の『郷土建築』が掲載された。この著作は、『民家論』と改題され、『今和次郎集　第2巻　民家論』[22)] に収録されている。その緒論では次のように説かれている。

「「建築とは自然に対抗して、人間生活を健康に快適に営みうるような施設である」という定義がいわれたりしているけれど、わが国のように柔和な気候――自然――に恵まれた国においては、こういう定義は、主として都会の建物

20）岩波文庫『日本の民家』pp. 29－30。
21）同書、p. 32。
22）ドメス出版、昭和46年刊。

の場合で、田舎の住まいの場合は、むしろ、自然との合奏で営まれているとみたほうがより適切だといえよう。[23)]」

その土地で無償で得られる材料で、使用目的に適合するように、簡単な作業で自給的に造ったものであれば、土地により材料となるものに相違があり、土地の気候に合うように最も簡単な工作物となる。そこで、このような建物は土地によって特徴のある姿となって現われる。そしてそれは家について考える際にかなり重要な要素となる。[24)]

「いちばん真実な実例を持ってくるならば、開墾の労作に働く人たちの、働く原野の上に最初に建てられる家屋である。町からは遠く離れて、しかも貧しい資金で始める彼らの仕事は、始めからそこへ御殿（？）を建てるわけにいかない。五年なり十年なり、田なり畑なりがものになるまで、きわめてぞんざいな小屋に住むのが現在での通則である。田舎の建物を紹介するとき、この開墾小屋のことを指示しなければならなくなると、食糧問題とか、移住奨励とかいう文字で新聞紙面で接するその現実の末端に固着する運命の人々のことを、平気で通り過ぎるわけにいかなくなるのである。それの床はじめじめしていて、また嵐のなかにさらされてそれらに対抗すべき力なく軒や出入口が揺れ、そのなかにカンテラの燈火で過ごさねばならない人々の夜を思うと、もはや観賞的な素朴を通り越して、彼らの家々は別な研究対象となってしまわずにいられないのである。彼らは超民家建築で、素朴それ自身である。[25)]」

このような、まだ家とはいえないような建物を小屋という概念のもとに見なければならない。そして小屋に対する理解は、民家に対する場合の重要な要素となる。田舎の家は多少とも、自然環境に支配され、自給的な工作を含むからである。[26)]

「いろいろなキッカケで地方地方の古い文化は、平野地にあるいは山間地に栄えあるいは侵入した。そしてそれらを生活慣習とともに、それぞれの郷土が

23）『今和次郎集　第2巻』、p. 11。
24）同書、p. 14。
25）同書、pp. 15－16。
26）同書、p. 17。

保有していたりするのである。すなわち都会にはすでに消滅している昔のスタイルが、今なお田舎に生きていて、しかもなおはっきりとその土地の生活者と呼吸を合わしている態が見られたりするのである。[27)]」

このことは、文化財保護委員会監修『民家のみかた調べかた』[28)] でも、次のように述べられている。

「だれもが経験するように、いなかの名もしれない、建築としては別にとり立てていうほどでもない民家のうちに、ハッとするようなデザインを見いだす。

民家のこの美しさは、ある特定の建築家の腕から産み出されたものではない。長い間、民衆の間にあって、少しずつ洗練されてきたものである。それだけにまた、人々の間にしみ透っているものである。

実用的な、飾りのない、そして作為的なデザインがないだけに、率直に人の心を打つものがある。建築は本来実用的なものである。それだけに民家のもつ美しさは建築の本質的なものに連なっている。[29)]」

川添登『今和次郎』[30)] では、次のように説かれている。

「当時の農村には、まったく素朴なかたちでの造形的な行為が生きて行われていた。彼は、それを工芸の美と呼んだが、長い歴史の手垢(あか)のついた、いわゆる民芸品などよりも、いま農民たちのしている素朴な行為の方が、はるかに生活の利にかなった造形の根源的なすがたを示している。私たちが過去を探るのは、現在行われている人々のさまざまな営みが、本来どんなものであり、どんな意味をもっていたのかを、その源にさかのぼって知ろうとするためではないのか。とすれば、いま農民たちが、目の前で行っている素朴な行為こそ、それでなくて、なんであろう。だから、今の民家論は、重要文化財などに指定されている年代のわかった古い庄屋の家から出発するのではなく、みずからふれる

27）同。
28）第一法規出版、昭和42年刊。
29）同書、p. 7。
30）『日本民俗文化大系（7）　早川孝太郎、今和次郎』　講談社　昭和53年刊所収。なお、川添氏（1926（大正15）－）の著作にはこれとは別に、『今和次郎』（ちくま学芸文庫、2004年刊）がある。

ことのできた粗末なハット（小屋）やバラックから説きおこすのである。」[31)]

「ここに柳田国男と今和次郎とが、やがてたもとをわかつにいたる決定的な違いがあったように思われる。柳田は、現在の農村に失われつつある過去を、つまりは過去から現在まで動いていないものに注意を集中したのに対して、今は動きつつある現在を見つめ、むしろ未来へ向けて少しずつ形成されていく、健康に満ちた工芸の美に注目していた。[32)]」

この「現在の視点」を説く記述は、駒敏郎『東京の老舗　京都の老舗』[33)] の中にもみられる。すなわち、

「藁屋根に象徴される古い日本家屋からの脱出が、大正から昭和初期へかけての日本人おおかたの念願だったのである。

太平洋戦争の戦災を受けなかった小さな城下町を訪れると、今も近世そのままの町なみを残す一画が見受けられる。厚い土塀をめぐらした上級武士の屋敷は、さすがに古き時代の威厳を保っているが、下級武士、それも足軽クラスの家になると、厚ぼったい藁屋根を載せて、さながら江戸時代そのままの姿である。

旅行者はそうした一画に立つと、讃嘆の表情をする。そして、たまたまその中に現代風に改築した家が混っていたりすると、眉をひそめて風情が壊されていることを嘆き、何とかしてこの姿のまま保存してほしいものだと発言をする。

だが、そうした藁屋根に土塀の家々は、気まぐれな旅行者の旅情を満足させるためにそこに残してあるのではない。脱出を志向しながらついに果たせなかったから、そこに残ったのである。残したのではなく、残ったのである。[34)]」

明治以来の近代化がもたらした結果を衣食住について見ると、衣の面ではほぼ完全に洋風化されたといってよく、食の面でも和洋両風が共に生活の中に定着した。住だけがやや立ち遅れたのは、衣や食のようには手軽にいかなかったからであり、近世式の日本家屋からの脱出志向は、常に存在していた。生活様

31）『日本民俗文化大系（7）』、p. 238。
32）同書、p. 239。
33）角川文庫、昭和57年刊。
34）『東京の老舗　京都の老舗』、pp. 242－243。

式の変化や光熱源の進歩に伴い、かつて快適だった建物の居住性が不十分になったからである。[35)]

「庄川の上流に集まっている合掌式民家などが、よい例である。民俗資料として貴重であり、建築法のユニークさでも目を見張らせるだけのものを具えた民家なのだが、その内部での厳冬期の生活は、ちょっと口ではいえないほど厳しいものだということを、現地の人びとから聞いたことがある。

もちろん何百年来、その地の人びとは耐えしのんで暮らして来たわけだが、それは暖房の技術がなかったからだった。現在はちがっている。進んだ暖房器具がありながら、それを有効に使えないという点に不満が生じる。合掌式民家では現在たいていの家が、室内を区切って改造して、冬期用の居住空間を設けているのである。[36)]」

また、近世式の民家はむだが多い。それは建物と生活様式がマッチしなくなったことから起ったものである。[37)]

「かつてはむだがむだでなかったのだが、現代のように空間の利用を高度に高めようとすると、このむだがいちばん問題になる。[38)]」

### （3）考現学の発想

大正12年（1923）の関東大震災の後、今は焼跡の復興に伴う風俗の急激な変化を記録しておく必要を感じ、これを考現学（モデルノロジー）と呼んだ。今は次のようにいう。

「「考現学」と称したかったのは、考古学に対立したいという意識からである。古代の遺物遺跡の研究は、明らかに科学的方法の学たる考古学にまで進化しているのにたいして、現代のものの研究には、ほとんど科学的になされていないうらみがあるから、その方法の確立を試みるつもりで企てたかったのであ

35）同書、pp. 243－244。
36）同書、p. 244。
37）同。
38）同。

る。[39]」

それは考古学と同様に方法の学であり、対象は現在われわれが眼前に見るものである。窮めようとするものは人類の現在であり、考古学における史学に相当するものとして、考現学においては社会学が考えられる。すなわちそれは社会学の補助学として役立つものである。[40]

「私たちの方法は全然とっぴなものではない。私たちのとほとんど同じ方法は現在の未開民族を対象として行われていることを思わなければならない。すなわち人類学者なり民俗学者なりの仕事がそれである。それらの学者は普通その対象を未開民族に限っている。……それらの民族学ないし民族誌もある意味でまさに考現学である。現在の未開的民族の生活を対象としている考現学としてである。仮に考古学に先史考古学と歴史考古学とあるならば、考現学にも未開考現学と文化考現学（未開社会考現学と文化社会考現学）とがそれぞれ成立するわけである。……そして私たちの携わる仕事は主として文化考現学（文化社会考現学）である」。[41]

民俗学の対象となる地域は多くの場合文明国である。その国の、特に平民の文化はどのようであったかを探求することが、民俗学の出発点であり、目的である。そして支配者を中心とした文献には記されない事実も想像できるため、民間のことがらに研究材料を求める。封建時代的色彩を多分に残存している田園において資料収集し、山間地あるいは離れ島にその視線を向ける。「まさに消え失せんとする事象をいまのうちに収集しておかなければ」というのが民俗学者の気持である。[42]

「そこに家が六軒あるとする。そして、それらの屋根が（A）草葺一戸　（B）瓦葺二戸　（C）トタン葺が三戸　あるとする。そしていま民俗学者がこの村に探求にでかけたとした場合、ほとんど例外なく一戸の草屋根の家に注意し、現

39）「考現学とは何か」『今和次郎集　第1巻　考現学』　ドメス出版、昭和46年刊、p. 13。（藤森照信編　今和次郎『考現学入門』　ちくま文庫、1987年刊、p. 358。）
40）同書、p. 14。（藤森編『考現学入門』p. 359。）
41）同書、pp. 14－15。（藤森編『考現学入門』　pp. 360－361。）
42）「考現学総論」　同書、pp. 39－40。（藤森編『考現学入門』p. 390。）

在の村の全舞台を忘れて注意力がそれに集中されてしまうであろう。なぜかというと、草屋根の家こそ古そうだし、事実また一般に原則的にそうなっているからである。すなわち彼は一区域における多数のもののなかから限定した数だけの研究対象をつねにつかまえて、他への注意――学的な注意――をおよぼさない。

……しかるに考現学においては、それらの事象全般をまず注視の対象とする。そして第二段として個々のものにふれてゆくのである。すなわちこの村ではA、B、Cの関係はそれぞれ1、2、3であることをまずあげて、その村と村との対比について考え、A、B、Cはそれぞれ発生あるいは伝播された年代の序列を表明するものであれば、その村の文化の開発あるいは外界文化の感化の層をしり、現在の生活様相をしるために努めんとする。[43)]」

「考現学とは何か」は昭和5年に春陽堂から刊行された『モデルロノヂオ（考現学）』（今和次郎、吉田謙吉編。昭和61年学陽書房より覆刻）に、「考現学総論」は翌6年に建設社より刊行された『考現学採集（モデルノロヂオ）』（今、吉田編。昭和61年学陽書房より覆刻）に、それぞれ収録されている。これらの内容は概略次の通りである。

『モデルノロヂオ（考現学）』

銀座・本所深川・郊外

採集・調査・考察

「銀座ハイカラ調べ」他全56項目

考現学とは何か

『考現学採集（モデルノロヂオ）』

考現学総論

考現学採集

「百六十秒間女給の足のモーション」

他全32項目

43）同書、pp. 40－41。（藤森編『考現学入門』　p. 391。）

断片

考現学雑考及雑文

小樽市風俗調査

またこれらに先立って昭和4年に中央公論社より刊行された『新版大東京案内』（今編。2001年ちくま学芸文庫）は昭和初期の東京の様子を知る格好の資料である。内容の概略は次のようになっている。

大東京序曲

東京の顔

動く東京

盛り場

享楽の東京

遊覧の東京

東京の郊外

特殊街

花柳街

東京の旅館

生活の東京

細民の東京

学芸の東京

市政と事業

この考現学について、梅棹忠夫氏[44]は次のようにいう。

「「何々学」と名のつく、数ある学問の分野のなかでも、日本うまれの「学」というのは、あまりたくさんはない。たいていはヨーロッパではじまったものを反訳して輸入したものである。「何々学」という名も、「なんとかロジー」の訳語としてつくられたものがおおい。そのなかにあって、「考現学」というのは例外的な存在である。これは、きっすいの日本うまれの学問であって、輸入品ではな

44）民族学者、1920（大正9）－。

い。一九二七年、東京において、今和次郎によって創始されたものである。[45)]」

今日でも、考現学という語は、少しも忘れられていない。新聞や雑誌には、「何々の考現学」という題名の記事がしばしば見られるし、同種の表題の単行本もある。問題は中身である。学問としての考現学はどうなったか。

現状では、考現学はその名を残しただけで、実体は消えてしまっている。「何々の考現学」などという言い方も単にジャーナリスティックな面白さからその語が使用されているだけで、この学問の由来や内容については、何も知られていない。学問としての考現学は、折角誕生しながら、うまく育たなかった。考現学は、学問としては発育不全に終った。[46)]

「本職の学者のほうは、本気で相手にしなかったのではないかとおもわれる。アカデミズムの世界において、考現学の出現が深刻な影響をおよぼしたとかんがえられる徴候は、どうもみあたらないようだ。

それにもかかわらず、いまここに、創始者今和次郎氏による考現学の全容を再点検してみると、今氏の考現学というのは、学問的にみて、意外にしっかりと構築されたものであることが、あきらかにみてとれる。……考現学は、すくなくとも今氏の考現学は、かなりふとい骨格をもって、がっしりとくみたてられているのである。」[47)]

考現学は風俗の科学的研究である。その学問的位置は民俗学（folklore）に近い。今の全著作を通じて、民俗学との親近性はしばしば表明される。考現学の立場からみれば、民俗学は過去の、主として封建時代の風俗を、現在の残存事象を材料にして研究するものである。従って、まさに消滅しようとしている事象に注意が集まる。一方、現代の風俗の学としての考現学では、過去の残存をも含めて、ありのままの全体の事象が問題となる。民俗学はもっぱら注意を村落に向ける。それは村落風俗学である。考現学は主として都会を問題にする。それは都会風俗学である。この二つはある意味で相互補完的関係にある。

45）『今和次郎集　第1巻』、p. 499。
46）同書、p. 501。
47）同書、pp. 503－504。

また考現学は民族学（ethnology）との関係も近い。民族学は主として未開社会をその研究対象とするが、考現学では、主として文明社会がその研究対象になる。民族学者や社会人類学者が、未開社会を観察・記述して民族誌を作るように、考現学者もまた、文明社会の事象を対象とする。民族学と考現学の関係はやはり相互補完的である。民族学は未開社会の考現学であるのに対して、普通の考現学は文明社会の考現学を指す。[48)]

今は初め柳田國男の指導を受けていたが、考現学を唱えて以降、両者の関係は決裂する。梅棹氏はいう。

「今は、「考現学総論」のなかでも、考現学と民俗学との方法のちがい、視点のちがいについて、かなり力をこめてかいている。今にとっては、両者は姉妹学であるとして、その親近性をみとめながらも、考現学を民俗学から完全に区別し、しかも対等のものに仕あげることが必要であったのだ。[49)]」

今は柳田が手を触れようとしなかった部分に、むしろ力を注いでいる。名もなき民衆の生活の研究という点からすれば、両者はまさに相互補完的関係に立っている。これからの日本人の生活について考えようとすれば、柳田の仕事と今の思想とは、発想の二大源泉となる。今の仕事の意味はそれほどに大きい。[50)]

「今日でも「考現学」という語は定着し、「何々考現学」という記事はくりかえしあらわれるけれど、その大部分は、卑俗化された亜流の、愚にもつかぬ世相の恣意的観察にすぎない。今が構想したような、総体的観察、統計、比較などのしっかりした科学方法論は、どこかへおきわすれられているのである。そういうものは、形は似ていても、今の考現学とは無縁のものである。」[51)]

「考現学」の語は『広辞苑』にも載っており、「現代の社会現象を組織的に研究し、現代の真相を考察しようとする学問」とされている。

---

48）同書、pp. 507－508。
49）同書、pp. 510－511。
50）同書、pp. 513－514。
51）同書、p. 515。

### （4）民芸論と考現学

柳と今の接点は注19）の他には『月刊民藝』[52] の中にごくわずかに見られるにすぎない。

ひとつは昭和14年（1939）8月刊の第1巻第5号に掲載された今の「民藝小論」と題する小文であり、以下の通りである。

「日々目に見る殆ど総てが、機械によって作られた感を與へるときに、便宜主義一方でない世界に接してみたい心を起すことがある。そこには人間の本能が沁み出てゐて、人と語るやうな安心と落付が、物に接して得られるのを意識出来るあくがない世界である。

だが、果して現代の文化の社会がそれを許してくれるものかどうか常に考へさせられる。そして民藝は現代社会には適合したものでないと云ふ反省で、いつもそれを高潮して云ふのを差控える境地になる。社会的に見て、実用品として使へる範囲のものは自分の生活の中へも悦んでとり入れたい。[53]」

もうひとつは昭和16年（1941）2月刊の第3巻第1・2合併号に載った座談会「新しき生活文化の諸問題」[54] である。この中で今はわずかな発言しかしていない。まとまったものは次の一個所のみである。

「式場　今さんは、日本に於ける手工芸と機械工芸の関係なんかはどういふ考を持っていられますか。

今　　私は民芸の新体制の号を拝見しまして、積極的に外部にあったわれわ

---

52）日本民藝協会刊。

53）『月刊民藝』第1巻第5号、p. 27。

54）出席者は以下の通り。

大熊信行（経済学者、1893（明治26）－1977（昭和52））
上泉秀信（劇作家、1897（明治30）－1951（昭和26））
谷川徹三（哲学者、1895（明治28）－1989（平成元））
今和次郎
柳宗悦
吉田璋也（医師、1898（明治31）－1972（昭和47））
式場隆三郎（医師、1898（明治31）－1965（昭和40））
浅沼喜實（民芸協会同人、1906（明治39）－1985（昭和60））
田中俊雄（沖縄染織研究家、民芸協会同人、1914（大正3）－1953（昭和28））

れも之に参加しなければならぬといふ感じを持ちました。実際日本の工芸を考へるとその他にないですね。今まで作られたものは皆外国のものばかりだ。どうも斯ういふ時勢になって見ると、日本的な家庭で使ふ物は今のところ民芸に頼らなければ頼る所はない。日常的な器具に今までの民芸を拵へる人が乗出して来て、それとタイアップして私共日常生活の役に立つものを積極的に何して行かなければならぬ。いはゆる工芸美術にわれわれの友人も居りますが、どうもあの人々の考へたものは金持のものしか作らない。最近は大いに自粛してやって来たさうですが、今までの習慣は大きいから、なかなか思ふやうにならない。やはり家庭生活、日常生活の領界まで民芸の人が入って頂いて、更に大きな気持でやって戴きたいと思ひます。[55]」

どちらも民芸に対する積極的な関心を示すものではない。しかしこれらが日本民藝協会の出版物の中に見出されることは、協会側が今の活動に対してある程度の関心を払っていたことを示すものであろう。当時、昭和11年（1936）には石黒忠篤を顧問、大熊喜邦[56]を会長として民家研究会が設立され、今はその中心メンバーであった。同会は会誌『民家』を昭和16年（1941）まで発行している。

今は民家の美しさに魅かれていたわけではない。藤森照信氏[57]は岩波文庫版『日本の民家』の解説の中でいう。

「白樺派の一つとして誕生した民芸運動は、農民の制作物の中にあくまで“美”を見ていたが……彼はちがって、農民の工作物の中に工作そのものというか、美の発生以前のもっとプリミティブな

〈人と物との初原の関係の面白さとせつなさ〉

のようなものを感受していた。[58]」

55）『月刊民藝』第3巻第1・2合併号、pp. 39－40。
56）注17）参照。
57）建築史家、1946（昭和21）－。
58）岩波文庫『日本の民家』p. 350。

たしかに柳の視点は民芸の「美」に集中し、いわばその点に限られている。しかし柳はすぐれた民芸品を求め、全国を巡り歩いた。そこには膨大な品々があったに違いない。その中から柳はすぐれた品を選び出したわけである。すなわち初めは当然全体を見渡す段階があったはずである。この段階はまさしく今の説く「考現学」に対応するといえるのではないか。「日本民窯の現状」(昭和9年、全集第12巻「陶磁器の美」所収)、「現在の日本民窯」(同)、「現在の壷屋とその仕事」(昭和17年、全集第15巻「沖縄の傳統」所収)、『手仕事の日本』(昭和23年、全集第11巻「手仕事の日本」所収) などの著作はすべてこの観点からのものといえる。

柳が全国を巡ったとき、多くの品が実際に作られ、使われていた。それらは決して当時としては「過去の遺物」ではなかった。そして柳は現代の生活のなかで、民芸品を活かすことを説く。民芸品は使うものであって飾って眺めるものではない。現在および未来に対するものこそが柳の視点である。このように見ると、一見つながりのとらえにくい今と柳の間には、実はかなりの親近性があるといってよさそうに思われる。柳の著作の中にも「考現学」の語が次のように使われている個所があることは、その一つの証左といえよう。

「なぜ朝鮮を知るために、昔をのみ調べるのであらうか。地下をのみ探るのであろうか。過ぎ去つたそれ等のものを、よくよく弁へるためにこそ、活きてゐる今の人達と、もつと親しんでよい。地上で現に作られるものを、もつとよく顧みてよい。こんなにも豊に示唆を与へるものはない筈である。さうしてこんなにも確実に活きた証拠を贈るものはない筈である。

この意味で朝鮮の考古学は、当然考現学の上に築かれねばならない。之ほど幸な考古学があらうか。之で学問を仮定や想像に終わらせずにすむ。[59]」

59) 「今の朝鮮」(『国際タイムス』昭和22年9月17日所載、全集第6巻「朝鮮とその藝術」所収、同書p. 379)。